武蔵野市の将来を考える市民会議（第3回）議事録

日時：平成 22 年８月 25 日（水）　午後７時～９時
場所：武蔵野商工会館　市民会議室
次第
１．開会
２．議事
（１）武蔵野市の将来像について
第二の視点　リスクを回避して持続可能な社会を自助・共助・公助で「支える」
３．その他
（１）議事録確認
（２）次回日程確認
日時：９月 17 日（金）午後７時～９時
場所：かたらいの道・市民スペース

＜配布資料＞
次第
資料１　委員からの意見について
資料２　武蔵野市の将来を考える市民会議　話し合いのフレーム案
＜参考資料＞
参考資料１　武蔵野市のコミュニティ構想
参考資料２　武蔵野市の将来を考える市民会議　傍聴者アンケート　第２回　集計結果
参考資料３　ＰＦＩの現状について（平成 22 年２月１日内閣府民間資金等活用事業推進室）

1. 開会

○事務局（企画調整課長）　では、第３回武蔵野市の将来を考える市民会議を開催させていただきます。今日、Ｊ委員から所用がございまして遅れるというご連絡をいただいておりますので、定時前でございますが、よろしくお願いいたします。

本日も夜分お疲れのところお集まりいただきましてありがとうございます。前２回は三鷹で開催いたしまして、今日は吉祥寺ということで、若干違った雰囲気でご議論をしていただければと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

机に次第がございますが、議事としましては、前回皆様でご議論いただきました２つ目のフレームのご議論をいただくということでございまして、「第二の視点、リスクを回避して持続可能な社会を自助・共助・公助で「支える」」というフレームについてのご議論でございます。

配布資料の確認をさせていただきます。まず次第でございます。それから、「資料１　委員からの意見について」でございます。これは、第２回会議から本日の間に委員からいただいたご意見です。これは、委員の皆様には事前に配布をさせていただいておりますので、ご一読いただいているかと思っております。表面は「Ⅰ武蔵野市の将来像について（私案）」、裏面は「Ⅱ策定委員の選定について（提案）」ということで、これは第１回でご説明いたしました武蔵野市の将来を考える市民会議設置要綱に基づく、この委員会から２名以内の委員さんに策定委員会に策定委員として参加していただくという件についてのご提案でございます。この件につきましては別途また事務局とお話をさせていただきたいなというふうに思ってございます。

それから、資料の確認を続けさせていただきますが、「資料２　武蔵野市の将来を考える市民会議話し合いのフレーム」でございます。これは前回、このフレームでということで決まりましたＤ委員、それからＢ委員から提案がありましたフレームに、Ｆ委員からも別途ご提案をいただいておりましたので、それを合成した資料でございまして、基本的にはこのフレームに、「区分」とございますが、Ｆ委員からもご提案をいただきました区分と、第１回の委員会からということで、委員の皆様のご発言要旨をここに当てはめるとこういう形になるということでございます。これはこれが答申の形ということではございませんで、あくまでもこのような意見があったというご確認にお使いください。今日の議論でもご参照いただければと思いおつくりしたものでございます。

それから、次は「参考資料１　武蔵野市のコミュニティ構想」でございます。これはきょうの議事に入る際に若干ご説明させていただきたく思っております。それから、「参考資料２　武蔵野市の将来を考える市民会議　傍聴者アンケート　第２回　集計結果」という資料がございますが、これは前回傍聴にいらしていただいた方々のアンケートと、その後にまた別途いただきましたご意見を綴ったものでございます。これも委員の皆様にはご参照いただければというふうに思ってございます。それから、「参考資料３　ＰＦＩの現状について」でございます。これも前回第２回から今日までの間に委員の方からこういう資料を出していただけないかというリクエストがございましたものですから、今日こういう形で出させていただきました。実はリクエストいただいたＪ委員が所用のため、まだいらっしゃっておりませんので、これもＪ委員がいらして、必要があれば若干ご説明をさせていただければというふうに思っております。

それと、今日、また机上に資料を２枚配布させていただいております。１つは武蔵野市の将来人口推計というものでございまして、これは事務局からのペーパーでございます。これも後で若干ご説明させていただきたいと思っております。もう一つは、やはり前回傍聴をいただきました方から別途このようなご意見をいただきましたので、これも委員の皆様にご参照いただければというふうに思ってございま

す。
　資料につきましては以上でございます。何か過不足ございませんでしょうか。何かまたお気づきの点がありましたらぜひ事務局にお申しつけいただきたいというふうに思っております。
　それでは、本日の議題に……。

○A委員　傍聴されている方でカメラを持っている方がいらっしゃるんですが、許可がないとだめなんではないですか。

○事務局（企画調整課長）　お諮りさせていただきたいと思います。今カメラをお持ちの方がいらっしゃいますが、私の知っている限りで申しますと、吉祥寺のミニコミ紙といいますか、長らく続いている情報紙をやっていらっしゃる方ですが、カメラの撮影につきましては皆様いかがいたしましょうか。

○事務局（企画調整室長）　原則、普通は事務局が撮ったものを広報に使わせていただくときにもお断り申し上げて、それを市報に掲載はしているんですが、傍聴席からのカメラとかビデオというのは普通は認めてはいません。皆さんがもしよろしければ認めてもいいですし、どういたしましょうか。

○B委員　週刊きちじょうじですね、その目的に限定していれば、私は結構です。

○C委員　私は何に使おうと、傍聴席からのカメラはやめていただきたいと思います。

○事務局（企画調整課長）　私の方でご案内申し上げませんで失礼いたしました。委員の方からこういうご意見でございますので、基本的には事務局が撮影する以外の撮影はしないというふうにさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。
　それでは、改めまして、議事の中に入ってまいりたいというふうに思います。

○C委員　時間がないのでこういう質問をするとまぜっ返して申しわけないんですが、「第二の視点、リスクを回避して」ですが、テーマですが、これは意味が、「リスクを回避して持続可能な社会を自助・共助・公助で「支える」」という、この文章、言葉の意味が、個々の言葉の意味はわかるんですが、これが何を言おうとしているのかよくわからないんですが、簡単に、時間をかけずにご説明いただきたいのですが。

○事務局（企画調整課長）　私どもというよりも、これは委員の皆様の議論ですので、D委員から、いかがでしょうか。

○D委員　私は調整計画からこの視点をもってきたんですけれども、続けて読むとわからなくなるかもしれませんけれども、リスクを回避すること、そして持続可能な社会をつくっていくこと、それはどうやってするかというと、自助・共助・公助で支えて、そういうものを実現していきたいということで、私は第４期の調整計画の第二の視点というところから引っ張ってきたんですけれども、これだけを読むと通りづらいかなとは思うんですけれども、いかがでしょうか。

○C委員　これについて余り話し合ってもしようがないので、大体わかりました。

○事務局（企画調整課長）　前回この辺のフレームについて、この形でということにはなっているんですが、今、D委員からご説明がありましたように、フレームとしてはこういうリスクを回避するということと、持続可能な社会をどうやってつくっていくかということだと、私どもは思っておりますし、要旨としまして、例えばリスク回避とか持続可能の中には、地域力であるとか、子育てとか、介護とか環境問題、平和というのが入ってくるのかなというふうな切り分けをしてございますので、できればこの要旨とか区分をご参照いただきまして、ご意見をいただければというふうに思いますけれども、いかがでしょうか。

○C委員　私は結構です。

○事務局（企画調整課長）　そういうことで、よろしくお願いいたします。

今、お話がございました、きょうは第二の視点でございますが、特に前回のご議論の中でも、市民と市の関係とか、いろいろ出ておりましたし、特に今回は地域の問題というのがクローズアップされるのかなと思っております。私ども事務局でこの２つの参考資料の１のコミュニティ構想というものと、将来人口推計というものをもってまいりましたので、若干ご説明をさせていただきたいと思います。

まず、今日お持ちしましたぺら資料「武蔵野市の将来人口推計」でございますが、前回も若干武蔵野市の人口がどういうような変化をしているのかということをご説明させていただいたところですが、この間私どもで将来人口推計というものをやっておりまして、その結果がまとまってまいりましたので、今日、簡単にご報告させていただきたいと思います。

この将来人口推計につきましては、平成22年度から42年度の20年間を推計しているものでございまして、まず性別、年齢別人口でございますが、一番上にございますように、平成22年現在武蔵野市の人口は登録人口で13万4,862人でございます。当面大規模な住宅開発とされておりますのは、これは21年度にいろいろな資料を集めてやったものでございますので、例えばこの間会場になりました三鷹のツインタワーとか、桜堤の旧の住都公団の跡のマンション開発などが予定の案件になっておりまして、このようなことを受けて、まだ当面桜堤なども開発は継続するということでございますので、平成30年には13万9,047人まで増加するという推計がございます。その後減少基調になりまして、20年後の平成43年、42年度には13万7,350ですから、ピークから1,600人ぐらいは減っていくという推計でございます。

下に今の推計のグラフが載ってございます。途中から２本に分かれておりますが、１本は平成18年度に行った推計でございます。それが左側の立ち上がっているグラフでございまして、右側が今回の推計でございます。ここで何が起こったかと申しますと、例のリーマンショックの関係で、若干住宅開発が遅れたといいますか、遅くなったというのがこれで見てとれるというところでございまして、全体的な形としては変更はございませんが、そういう経済環境を受けまして、若干ピークがくるのが遅くなるということと、減少傾向が始まるのが若干遅くなるということが見てとれるグラフになってございます。

それから、その下でございますが、人口構成と載ってございまして、５歳刻みで、左側が男性、右側が女性というふうに５歳刻みで2,000人単位であらわした棒グラフになってございます。平成22年をご覧になっていただきますと、若い層が明らかに少なくなっておりますが、これは最近だけの傾向ではございませんで、このような傾向はずっと続いているということでございます。健全な形と考えれば、砲弾型と申しますか、下まで太さがそろっていれば健全なのかもしれませんが、もう長らく下が縮まって

いる形が続いているという状況です。それが20年後の想定でございますが、その形がまたどんどん崩れてまいりまして、ピークが50歳の年齢のところが一番多くなっております。それから、若い年齢層がもっと減ってくるという状況が見てとれます。それと、特に女性の欄でございますが、一番上でございます、すごく張り出しております。ここの人数が多くなってくるということでございますが、これは85歳以上という切り口になっておりまして、その下までは全部５歳刻みなんですが、ここだけは85歳以上というふうな分け方になっておりますので、これはいろいろ累積してまいりますと、女性の85歳以上のところがぐっと増えていくということになってございます。

それから、このページの裏面でございますが、世帯数が載ってございます。これは国勢調査が基礎になりますものですから、平成17年がベースになっておりますが、６万9,365世帯だったものが、平成37年、これは国勢調査をやるという年の推計でございますが、７万5,565世帯でございますので、おおよそ6,000世帯増えるということになります。ここがピークでございまして、平成42年には７万3,921世帯でございますので、今度はここに向けて若干世帯数も減っていくという傾向でございます。それから、よくいわれます平均世帯人員でございまして、１世帯当たり何人の方がいらっしゃるかということでございますが、既に今現在で１世帯当たり1.92人というのが武蔵野市の現状でございます。１世帯で２人はもう切っているという状況でございますが、これはずっと減少傾向をたどりまして、20年後には1.86人になるだろうという推計をしている。人口の動態としましては、いずれにしましても、若干今後ふえる要素はございますが、いずれにしても減っていくという状況が推計されているというのがこのペーパーでございます。

もう一点、「参考資料１　武蔵野市のコミュニティ構想」です。今日、改めて持ってまいりました「武蔵野市のコミュニティ構想」でございます。これは皆様お住まいでご存じでいらっしゃると思いますが、基本的にはでございますが、全域をカバーする町会、自治会というのは武蔵野市にはございません。これは歴史をたどりますと、町会というものが、これは国が整備する単位として1940年に戦時下の末端組織として国が整備をしてきたということだそうでございます。それが第二次世界大戦が終わりまして、新しい今の日本国憲法の施行と同じ時期の1947年に町内会、部落会等の結成自体が禁止されるという状況になりまして、全国どこでも町内会というのが全部なくなった時期があったということでございます。その後1952年になりまして、この禁止が解かれまして、町内会を回復させていったところがございますが、武蔵野市の中では町内会というものを改めてつくらなかったという状況でございます。

それで、武蔵野市のコミュニティ構想ということでございますが、1971年に武蔵野市は第１期の基本構想、長期計画の策定の後に、このコミュニティ構想というものをつくって、今までコミュニティという考え方でやってきた。それが今の武蔵野市のベースになっているというふうに考えてございます。１枚おめくりいただきますと、基本的な考え方がここに載ってございます。「武蔵野市は」ということで始まっておりますが、昭和46年２月に武蔵野市長期計画を策定したが、この長期計画においてコミュニティを武蔵野市の市民生活の基礎単位とするような位置づけを行いました。

コミュニティの基本的な考え方は次のとおりであるということで、４点上がってございます。（１）としまして、「コミュニティは、市民自身が長期の自主活動の過程でつくるものである。したがって、上からの制度的強制ではない。」２つ目としまして、「コミュニティは、地域の特性、市民交流のチャンスなどによって生まれてくるものであり、開かれた開放的都市空間をなしている。したがって、閉じられた閉鎖的都市空間ではない。」３つ目でございますが、「コミュニティは、地域全体の計画的な市政水準上昇の結果として生まれる。したがって、特定地域への重点施策は行わない。」４点目でございますが、「市民のコミュニティづくりのために、市は市民施設」、コミュニティセンターもそうでござ

いますが、他の施設もそうでございます。「生活道路、さらに緑のネットワークの適正な計画的行政によってこのコミュニティづくりに協力をする。このため市民参加によって「市民施設長期計画」を策定する。」これがベースになっております。

また、これはご参照いただければと思っておりますが、武蔵野市は町内会、自治会ではなくて、コミュニティという考え方でやってきた。これはおよそ40年近くの歴史があるわけでございますが、これが果たして本当に当初の予定どおりうまくいってきたかどうかというところはいろいろなご意見があろうかと思いますし、現実の活動とか、市民生活の中で、コミュニティでやってくいるいろいろな今後の課題というのも出てきているのかなという現状にあろうかと思っております。

2. 議事

(1)武蔵野市の将来像について

第二の視点 リスクを回避して持続可能な社会を自助・共助・公助で「支える」

○事務局（企画調整課長） それで本日のフレームでございますが、第二の視点というところで、地域力ということが要旨として上がってきているのではないかなと考えているところでございます。

それから、運営についてご指摘があるんですが、私が進行させていただくという立場でございますが、私から取り立てて何々委員というふうに余りご指名をさせていただくというよりも、基本的にはこの委員会の自発的な議論を、ちょっと失礼ですが、サポートさせていただくという立場で考えておりますので、ぜひこの委員さんの中で積極的にご発言をいただければと思っております。ただ、切り口としまして、今日はコミュニティのことが大きいと思いますので、毎回同じ順番ではと思います。B委員からご発言ということでいかがでございましょうか。

○B委員 初めに申し上げたように、私はコミュニティというのは、コミュニティセンターといってもいいんですけれども、非常にこだわっております。それは、この前も申し上げたことなんですけれども、武蔵野市が今、市民参加とか、協働ということをいう時に、基本的に市民がコミュニティセンターで、地域で力をつけるということが大きな原動力として必要だと思っているからです。コミセンがこの30有余年、一番古いところは30年を超しているわけですけれども、この歴史は市民にとっては試行錯誤で、かなり厳しいものではあったのですが、この30年間の積み重ねというのは、今後の武蔵野市の発展にとって基本的に大事なものだと思っています。ただ、今、事務局がちらっとおっしゃいましたけれども、ある意味でいえば曲がり角にきている。コミュニティセンターあるいはコミュニティ協議会そのものがいろいろな問題を抱えているというのも事実でありますし、昨年コミュニティ市民委員会の答申などもありましたけれども、この前のコミュニティ市民委員会はかなり堅実な報告書だったと私は思っております。今度の長期計画ではコミセンの更なる発展に向けて、もう少し飛んだというか、大胆な発想も今後10年というようなことを考えた場合には入れていっていただきたいと思っています。

地域力といった場合には、コミュニティセンターを中心としたまちづくりのほかに、福祉でのまちづくりというのも今非常に大きな流れになってきていると思っております。こういったものが総合的に各町で重層的に重なっていく中で、地域の住民に力がついて、そのことが、市民自治とか住民自治、そういったことへの道を開いてくるんだと思っております。まだ武蔵野市では現実に起こっていませんが、例えば私でしたら南町のある計画について、市民がそれを決めていく。予算も、多くはないと思うんですけれども、そういうふうにきちんと保障されるといったようなことに将来的にはなるのではないかと思っております。だから、この地域力、コミュニティといったところは非常に力を入れて、今後話し合

っていってほしいと思っております。
　もう一つ続けて言うのだったら、このこととつながるものとして、市民自治条例とか、自治基本条例といわれるような仕組みづくりというようなことも同時に考えてほしいと思っております。
　とりあえず以上です。

○D委員　私は東町一丁目に住んでいるんですけれども、「コミセンだより」が３つのコミセンから入ります。東町コミセン、本宿コミセン、本町コミセン、３つのコミセンからコミセンだよりが時々に入るんですけれども、それぞれのコミセンでとても特色があって、強み、弱みを感じるというんですか、とてもすばらしく、３つも入るということで、とてもすばらしい情報をいただいているなと思うんですけれども、いろいろ見ていると、コミセンだよりから見ても、コミュニティで違う取り組みをなさっているなというのを感じるんですけれども、やはり30年以上コミュニティ活動を実践されてきた結果、例えばコミセンによって活動の取り組み方、それから抱えている課題が違ってきているのではないかなというふうに思います。東町コミセンには東町コミセンの特色があり、本宿に本宿のがあり、本町には本町の課題があるというふうに感じるんですけれども、今後はそれぞれのコミュニティごとに画一的なサポートをしていくのではなくて、このコミュニティにはこういうサポートが要る、こちらはこういうサポートが要るというような、個別のきめ細やかなサポートが要るのではないかなというふうに私は感じました。

○E委員　B委員に質問なんですけれども、先ほどおっしゃった第６回のコミュニティ市民委員会最終報告、それを読ませていただいて、B委員も委員を務めていらしたと思うんですけれども、今、大胆な発想というものについて言及されていて、私はあの最終報告を読んで、さらなる論点とか、問題提起を積極的にやられていて、堅実な提言とおっしゃられますけれども、市民委員会の中でもっと大胆な発想があったほうがいいとか、そういった意見は実際にあったのでしょうか。

○B委員　あそこの場面では委員の人たちが現在のコミュニティの現状をまず理解するのに半分の時間を使いました。今、おっしゃったように、コミセンによって非常に違うんです。それは進んでいる、遅れているの問題ではなくて、私は個性だというふうにとらえたいと思っているんです。まず違うということから始まって、それを理解したというところで半分の時間が過ぎて、その後につきましては、今のコミュニティセンター、コミュニティ協議会の活動をどう発展できるかということで、非常に地についた論議をしたと思っております。私の中にはもう少しもっと先についての展望というよりも夢はあったんですけれども、それはあそこの場では書き込むところまでにはいっておりません。無理だと思ったので、そこはしなかったということがあります。ただ、さっきも言ったように、コミセンが一層の発展をするためには、今の非常に現実的にやっていくということのほかに、少し遠いところでもいいんですけれども、目標を持つというようなこと、それも市もよくご承知の上で、一緒につくることだと思うんです。市民だけでつくるのではないし、そこら辺のところでもうちょっと一歩先に進んでほしいなと思っています。

○事務局（企画調整課長）　コミュニティの話でコミュニティセンターもそうなんですけれども、地域として見るといろいろなコミュニティ、地域もあると思いますので、いろいろなコミュニティだけではなくて、いろいろ地域の話をしていただければと思うんですが。

○Ｆ委員　その前に質問みたいになってしまうんですけれども、第１回の会議のときに、今現在動いている計画として50ほどリストアップしたものをいただいたんですけれども、先ほどから議論に出ております第６回のコミュニティ市民委員会の内容というのはホームページの施策、計画のところから見られるようですけれども、必ずしも、今基本構想、長期計画と同時並行的にというか、整合性を持って動いている50の計画の中でいうと、それはどれに当たると考えればよろしいんでしょうか。

○事務局（企画調整課長）　それはコミュニティに関する、市でいうと計画というよりも、評価をしていただいたというふうに思っております。

○事務局（企画調整室長）　提言を受けるような形でコミュニティ市民委員会から提言をいただいたという形です。先日子どもプランとか、プランを50ほど掲げましたのは、あれは市の計画として正規に定めたもの、その計画によって市政運営が行われている。この４年間にいただいた各種のコミュニティ市民委員会からの報告書もそうなんですが、そういうものは次の長計にいかに反映させるか。まさしくＢ委員がおっしゃったような形で次の長計にどのようにそれを受けていくかというような形の今後議論になっていくというような形です。

○Ｆ委員　そうすると、まさに地域のコミュニティをどう維持していくのかというのは非常に重要な問題だと思いますので、長期計画の中でも非常にウエートを持って考えるべき重要な話なんだというところは、私もそう思うし、多分恐らく今までの議論を踏まえて考えるとほかの委員の皆さんも同じかなというふうには思っております。

一方で、では、委員会の答申の中にたくさん出てきている内容のどこにウエートづけをすべきなのかということまで、この市民会議で議論すべきなのか。それともそれは策定委員会である程度議論をしていただいた上で、地域別とか、グループ別等の市民会議の中で議論を深めていくといったものなのかというと、何となく私は後者のほうなのかなというふうには思うんですが。そういう理解であれば、とりあえず私はコミュニティの話につきましては非常に重要なことなので、長期計画の中で非常なウエートを持って考えていただきたいということで、とりあえずは意見とさせていただきたいと思います。

○事務局（企画調整課長）　若干、事務局がしゃしゃり出て申しわけないんですが、私ども今回の第５期基本構想で地域の問題は急務だと思っているんです。さっき申しましたコミュニティ構想につきましては、市から何かをやってくださいという形ではなくて、自発的に活動していくんだというのが根本にありますし、一方、市と市民の皆様の間で、例えば福祉とか、防災とか、まちづくりとか、いろいろな形で、これは協働という形で、いろいろな課題解決をしているという、いろいろな側面があるんだと思っておりまして、そこの中で、いろいろな問題が起こってきているのかなと思っております。やってくださる方は非常に熱心にやってくださるんですが、その方にとってはコミュニティ活動もしていらっしゃるし、福祉のほうにも顔を出していただいているとか、青少年もやっていただいているという、そういう問題もあるのかなと思っております。是非、ご自分でお考えになる地域のいろいろな問題ですとか、地域がどうやって活発になっていくのかということで、コミュニティセンターばかりにとらわれないで、いろいろなご意見をいただければと思います。

○G委員　私は武蔵野タワーズに引っ越してきたばかりなので、実際どのようなコミュニティ活動が行われているのかということについては述べることができないので、自分が思っているコミュニティということについて、少しお話しさせていただきたいと思います。

大げさな言い方では、人間というのは一人では何もできないので、まず家族という単位があり、その家族よりさらに大きくなった単位として地域、コミュニティというものがあり、それから市、県、国ということで、このような社会がつくられて生活しているわけだと思います。このコミュニティの活動を活発にし、より良いものにすることがより良い武蔵野市につながるということは、だれもが理解されていることだと思います。では、このコミュニティをより良いものにするにはどうしたらいいかというと、根本的にある家族という単位、そこがきちんとしていないとより良いコミュニティ活動とか、コミュニティというものを運営できないのではないかと思います。

それで、私の場合一つ一つ細かい課題があって、話ししたいことはたくさんあるんですが、今回は５回ということで、そのようなことは不可能に近いことだと思っていますので、前回、前々回、そして今回と、共通して述べていることは、やはり市民として高い意識を持つということの一点で私はずっと述べてきております。この家族という単位を確実なものにするというのも、やはり武蔵野市の市民としてちゃんとした高い意識を持つということがきちんとした家族をつくり、それが良いコミュニティにつながり、良い市につながっていくことだというふうに思っておりますので、それがまた次の、下にあります項目のライフスタイル、教育ということにも全てつながってくることだと思っております。高い意識を持つということはプライドを持つということなんですが、それは高ぶるとか、そういうことではなく、人間としてやってはいけないこと、これはやらなければいけないということを正しく見分けることができ、ちゃんとした行動ができることということだと思っております。

というのも、引っ越してきて、１人だれかがやってしまうと、ばたばたと悪いほうにすぐ流れてしまうんです。例えば市として自転車をきちんと整備され、税金をかけて駅前にちゃんとした自転車場はつくってあるにもかかわらず、ちょっとだけだからいいやと、こういうふうに自転車をちょっととめてしまう。小さな行動、ルールを守らない行動が税金の無駄遣いにつながるんだということは市民として意識があるかというふうに、例えば具体的な話になるんですが、例えばそういうことを皆さんに問うと、言われて気づく方もいらっしゃれば、そう思っている方もいろいろいらっしゃると思うんですけれども、いかにちゃんとした意識を持つということが一番税金の無駄遣いではなく、自分たちの納めた税金が使われ、より良いコミュニティに生かされていくんだということをここでは私の意見として述べたいと思います。

○C委員　先ほどお話ししてくださった武蔵野市のコミュニティ構想、こういう立派なものがあるということを私自身知らなかった、非常に認識不足で恥ずかしい次第なんですが、こういう立派な理念があって、そういう構想があって、それが現実に推し進められていたんですけれども、私たち一市民として、日常の生活の中でそれを余り実感していない、感じていなかったというのが正直なところでございます。

先ほどコミセンのお話がございました。私はもともと今回のお話で最初に申し上げたのは、今やハードの時代からソフトの時代だと。物から人だと。もっと人を大事にしようということをお話ししたんですが、そのことを突き詰めて考えていくと、人々の交流であるとか、助け合いであるとか、相互扶助、そういうことが浮かび上がってくると思いますし、そういうことを実践するということは、コミュニティの活動ということと非常に表裏一体結びついているんだと思うんです。そういう意味で、意識を高め

て、交流を盛んにして、ハードからソフト、物から人への動きというものを進めたいなというふうに思うんですが、現実を見てみますと、例えばコミセン、私は中町に住んでいます。中央コミセンとか、あちこちにコミセンがあるし、皆さんそれぞれに活動していらっしゃるということもよくわかっているんですが、現実にはそのコミセンの活動に一体市民のうちのどれだけの人が参加しているか。あるいは、それを利用しているか。生かしているかということを考えると、私自身の感想としては極めて限られた人しか現実には関わっていない。あるいは、それから利便を得ていない。あるいは積極的に関わっていないというような現実があるんじゃないかなという気がするんです。

せっかく良い構想があり、良い施設もありながら、それが十分に生かされていないという状態を改善して、もっと多くの人が喜んで参加できるようなコミュニティ活動であり、コミセンというのでしょうか、コミセンの活動になれば、こういうコミュニティ構想の具現化がさらに進むんじゃないか。みんながもっと参加できるような体制をつくるということ、それは市からもそれについてはいろいろきっかけをつくっていただく、市のほうでも協力していただいて、みんなが参加できるような土壌をつくる、地盤をつくるということが非常に大事なことになってくるんじゃないかというふうに思います。

コミュニティに関してはそんなことを考えております。

○D委員　C委員もおっしゃったように、コミュニティセンターを全く利用しない人も結構いらっしゃるということで、コミセンはコミュニティの拠り所にはなるけれども、コミュニティ全ての問題を担ったり、解決していったりというのはちょっとなかなか難しいと思うんです。特にまた単身世帯や、それから夫婦のみ世帯が今後さらに増えてくると思われるんですけれども、そういう方はなかなかコミュニティ活動に関わりを持てない人たちではないかなと思うんです。そういう方をどうやってコミュニティ活動に巻き込んでいくか。それはいろいろな仕組みが要ると思うんですけれども、もちろんコミセンを中心としたコミュニティ活動も大事ですけれども、例えば防犯ですとか防災、それから美化活動などでちょっと、前回もＦ委員がおっしゃったオープンカフェ的な、気楽にちょっと参加できるような、誰もが関わりやすいようなコミュニティ活動のようなものも必要ではないか。コミセンの活動ももちろんすばらしいんですけれども、そういうものがあって、また入っていけるという、そういう仕組みも考えていってはどうかなと思います。

○H委員　コミュニティセンターはかなり特殊なシステムだと思います。見ていると、この町には町内会の組織はない。町内会に代わる、これは非常に柔らかい組織ですね。組織にならない。参加したい人は寄ってくるけれども、しない人は寄らない。極端にいえば用事はないと思っている。だけれども、町内会とまではいかないまでも、あるしっかりしたライン、ネット、それから共通の考えの通達、場合によっては何かコミセンでなければ手続できないことだとか、そういうことがあったほうがコミセンは生きてくるんじゃないか。

この市は代々良い市長さんが市民の声を聞いて、市民のためにあわせて動くというのが結構強いんですけれども、それが強過ぎると、ばらばらになって、一生懸命やっているんだけれども、なかなか力になって出てこない。これは日本全体の問題でしょうけれども、私らのような時代に育った者としては、非常に弱々しい組織だなと。だから、何かその辺もうちょっと両方がちょっかいを出して、結びつくようにしたほうがいいんじゃないですか。

一例として、いろいろな組織をいろいろつくってくださっていますね。コミュニティセンターだけではなくて、そういうものができているということを知らないし、また知らなくてもいい。そういう感じ

で非常に弱くできている。だから、財政豊かな間、評判が良い間はもちますけれども、それが崩れ出したときに、どう運営できるのか。

一例は、この間からＩさんから年寄りの仕事をつくれと言われたんですけれども、市にはシルバー人材センターというのがあるんですね。あれで一応市としてはお年寄りの方の仕事の世話を見てあげていることになっている。今は千何百人参加していますね。そういうのがあるわけです。だから、それをＩさんはどう利用しようとしたか、考えられたか。全然そんなものを知らなかった。そういう可能性はあるわけです。だから、何かそういうものが弱過ぎるなという気がします。

シルバー人材センターも団塊の世代ががっと出てきますと、ここにおられる団塊の世代というのは社会ではかなり立派な仕事を立派にやってきた人が多いと思うんです。今シルバー人材センターが持っている、あげられる仕事というのは、そういう方たちに対して質量ともにちょっと不足だと思います。だから、そういう方々ががっと乗ってくる流れにならない。だからシルバー人材をつぶせということではなくて、では、この機会に人材を見て運用を変える。悪いですけれども、理事さんもそれに合うような理事さんにするとか、そういうことをしないとシルバー人材はつぶれていきます。だから、そうならないように、そういうことをあることを周知する。それから、こういう団塊の世代が、あふれるといったら怒られますけれども、力が余って出てくるときに、どういう形に直すか。そういう問題があると思います。

それから、いろいろな市民の意見を集めたいと言っておられますけれども、資料を拝見すると、いろいろな委員会があって、いろいろな協議会、いろいろな懇談会があって、資料を拝見しても物すごい数ですね。幾つあるかわからないですけれども、意見を集めたておられる。それ以上に集める必要がない。それをどうやって組織立てるか。どうやってテーマを与えて、テーマを整理して集めるかという、そういうことをやられたら、聞いて回るよりはかなり効率が良い。何かありませんかというよりは効率が良い。ですから、今よりも市の運営は、市民に何かあったらどうぞ、何かありませんかという、遠慮しないで、自分の企画も出していく。企画とこちらの市民の考えがどうかんでいくか。それが今の市には非常に弱いと思います。これは代々市長さんの思想、あるいは議会のいろいろな思想も絡むと思いますけれども、そういう行政担当ががっちり組んでいくような、コミセンも町内会の一部みたいな機能をある程度持たせていけば、もっと生きてくると思います。

余計ですけれども、感想を。

○事務局（企画調整課長）　今投げかけのありましたＩ委員、いかがでしょうか。

○Ｉ委員　地域主権という言葉が今いっぱい出ていますけれども、本当に地域主権のリーダーとしてやっているのは、ご存じのように名古屋市長の河村さんとか、近くでいえば選挙で破れました山田区長、間違いなく変えようとしています。掲示板一つ見てもわかります。皆さんぜひ杉並の掲示板を見ていただきたい。武蔵野市の掲示板は画鋲を張って、文房具の宣伝しているみたいなもの。画鋲がいっぱいあって、私の区からほかの区は入らないでくれ。ここに書いてあります閉鎖的都市空間ではないかと僕は思います。コミセンという言葉を聞いただけでもうそう思います。汚い言い方ですけれども。コミセンとか、民生委員というのは、聞いただけで、私はそう感じます。

なぜならば、昔、民生委員の方に親しい方がいましてお話を、私のお客様ですから、飼い主さんの依頼で行きますとお話をするんですけれども、話の内容は、人、物、金、人、物、金ということで、江戸時代みたいな士農工商の考え方が、すばらしい人なんですけれども。私は、人、物、金なんというのは、

これは高度成長時代の考え方で、一番先にくるのが時間、右矢印で情報、右矢印で知恵、それから人、物、金。私は、時間と情報と知恵、そのほうがもっと大切なんです。だけれども、お金も大切ですけれども、もちろん大切なんですけれども、民生委員の方々も、口では言いませんけれども、交通費は市で出してもらってほとんどボランティアなんです。ただでやっている。私はただほど怖いものはないと思っているんです。ただほど高くつくものはないと思っているんです。こんなことを言っては失礼ですけれども、そういうものを放ったらかしにしたのが北朝鮮の政策だと、私は思うんです。言い方がちょっと乱暴ですけれども。

だから、ただだ、ただだ、ただだということで、口では言わないけれども、コミセンもそう、民生委員の方もそう、だから、大阪府と北海道は民生費が全予算の30から40％いっているそうです、ネットで見ますと。今それが大きな問題になっています。だから、バランスだと思うんです。ご存じだと思います。僕もサラリーマン時代に20対80の法則、私はそれを信じていますけれども。要するに、全世界の国、20％の国でほとんど80％の総生産を上げている。要するに20％ということは40カ国で世界の売り上げの80％を上げているという現実があるわけです。だから、武蔵野市の財政も多分、私は計算していませんけれども、13万人いるんだったら13万の20％ぐらいの人たちで80％ぐらいの税を賄っていると私は思います。

だから、バランスというものがあって、それが弱い者を助けなければいけない、助けなければいけないということになってきますと、私は20％ぐらいだと思っていますけれども、とにかく弱い者を助けなければいけない、弱い者を助けなければいけないと、大阪府ぐらいの地位になってしまう。

私が言いたいのは、その根底にあるのは、コミセンでも一生懸命やっている方はいらっしゃいます。話ししたら立派な方ですけれども、暇な方なんです。暇で暇でしようがない。リーダーは絶対暇な人に与えてはいけない。忙しくてしようがない人がリーダーはやるべきだと思っています。

私が提案するのは、先ほどＨさんがおっしゃったように、シルバーセンター云々ももちろん結構なんですけれども、武蔵野市で10個ぐらい株式会社をつくって、リーダーを公募するんです。リーダーもいいところ50歳まで、私はもう70ですから、70ぐらいになると口では言うけれども、やらないです。もうできないんです。だから、30から50くらいの若い人、コミセンでも若い人が、例えばＥさんぐらいの人がコミセンの委員になったらまた新しいことをやると思います。やらなければつまらないですから。今はコミセンも民生委員の方々も、おつき合いしていると、みんなＩさんいいところに来てくれた、良いところに来てくれた、お茶を出してくれて、コーヒーを出してくれて、暇つぶしですよ。こっちも失礼だから我慢しますけれども、一例を申し上げますと、それがコミセンとか民生委員の一番いけないところだと思います。

だから、余りにも弱い者を助ける、助けるんじゃなくて、この前も申し上げましたように、弱い人は徹底的に、産まれつき目が見えない、産まれつきに働けない人は、国で、市で支えるべきだと思います。それ以外は全部働けと。働くことがコミュニティなんですと私は思います。

以上です。

○Ａ委員　コミュニティに偏って発言しづらいんですけれども、子育て支援なんですけれども、こればかりはコミュニティというよりも行政でしっかり面倒を見ていただきたいなというのがあります。今日いただいた人口推計を見ていても、最終的に平均世帯数が２を切っているということは、夫婦世帯がいなくなっている。あげくの果てに間違いなく子どももいないという状態ですね。武蔵野市の出生率はたしか１を切っていると思います。たしか0.98というところなので、そういうのもひっくるめて考えると、

子育てしづらいのかな。20年後を見てもやはりそこら辺の世代が今よりもさらに減っているということは、武蔵野市は将来的に見ても子育てしづらい市になるんだろうなというのは、やや問題なのかな。上のほうばかり出っ張っているので、下がいない限りは、Ｉさんが言ったように税収入は一切上がりませんから、下を増やすような、手としてはコミュニティとかどうこうではなくて、行政としてちゃんと保育園の整備なり、学童なり、さっきＩさんがおっしゃったような産まれつきの障害を持った方々の支援をもうちょっと、現状でも去年確かに１個増やしてはいただきましたけれども、障害児の方の待機児童というのはまだまだいますので、そちらもちゃんと目を向けていただいて、行政としてのサポートという部分のところだけは、コミュニティではなくて行政の部分として必ずやっていただきたいと思います。

保育園にしても、今回も今の市長になって１個つくっていますけれども、それでも待機児童は100人弱いると思っています。さっきもおっしゃったように、桜堤がまだ人口が増加するというのであれば、桜堤の方は特に、まだ現状でも足りていませんから、あっちのほうばかりというのもやや問題かと思うんですけれども、そういうところに重点的にしていただきたい。

コミュニティというところもあるんですが、実は武蔵野市児童館がないのを皆様知っていますか。１つしかないんです。それもどうなのかというのは非常にあります。コミセンが児童館になるかというとそこはちょっと違うと思うんですけれども、だからといって全市そこらじゅうに児童館をつくれという訳でもないんですけれども、そういうところの整備というところで、保育園なり学童なりというところの整備を、今第三次子どもプランで書かれてはいますが、もうちょっと突っ込んだ形で今後10年のところでは子育てがしやすい。あとは若い人たちが定着しやすいというところは非常に強く今回の長計の中には盛り込んでいただきたいと思っています。

以上です。

○Ｅ委員　私は、今回の第３回のフレームが、第二の視点で、リスクを回避して持続可能な社会を自助・共助・公助で「支える」、これについては前回私が自助・共助・公助の関係を、第４期の長期計画の調整計画で書かれているように、トライアングルの関係から自助をまず土台にもってくることが大事だということを主張させていただきました。ですので、今回はこの点については説明は省きます。

今回私が新たに意見として申し上げたいことは、今回の大きなテーマは地域をどのようにしていくか。コミュニティとか、地域力をどう考えていくかということで、ここで一点申し上げたいことは、今までいろいろな方から意見が出たように、もっと長期計画とか、第６回のコミュニティ市民委員会の最終報告とか、そういった出されたものをうまく活用すべきだと私は思いました。私の考えとしては、地域をどのようにするかという論点に対して、一つのアプローチとしてコミセンの役割は大きいなと思いました。それはコミセンが今までやってきたこと、地域に貢献してきたことを、私は実際にまだ武蔵野市に住んで１年半ぐらいで全然知らない若輩者なんですが、資料を見た限りで、すばらしい貢献がされていると私は思っています。

そういった上で、地域に果たすコミセンの役割が一つのアプローチとして重要だという上で、ではどのようにコミセンを生かすかということを考えたときに、一点は、第６期のコミュニティ市民委員会の最終報告、これについて何かまだうまく活用されていないなという現状があると私は思いました。

例えば、武蔵野市長の邑上さんが平成22年度の施政方針並びに基本的施策で、これについて第６回の武蔵野市コミュニティ市民委員会の最終報告について言及されているんですが、それについてのコメントでは、さらなる論点をお示しいただいて、最終報告の中で、それで、今後も議論を積み重ねてまいりますと、その一言だけだったんです。私はこれを見て、実際にコミュニティ市民委員会の最終報告を見

て、アンケート調査も2,500人に送って、回収率も50%以上で1,000以上返ってきたりしている。コミセンが抱えている問題とか、先ほどいろいろご意見が出ましたように、コミセンについて、何をやっているのか知らない人がいるとか、そういったことも数値化されて、どれくらいの人が知っているかとか、そういう基本的なデータを時間をかけてしっかりアンケート調査をやったり、地域別のヒアリング調査であったり、パブコメであったり、いろいろな形で、この最終報告の長期計画に反映させる意義というのは検討すべきだと思ったのです。そういった意味で、私は今回の議論に臨む立場として、最終報告をもっと生かす、今まで築いてきたものをもっと第５期の長期計画策定において生かすべきだと私は思いました。

以上で終わります。

○事務局（企画調整課長）　今、いろいろ地域の問題、課題も出てまいりましたが、若干私どもも、さっき申しましたように次の基本構想では地域というのが問題になってくると思っております。

○事務局（企画調整室長）　１点目に、きょうお配りしたコミュニティ構想というのは、先ほど１ページしかご紹介しませんでしたが、もう一つ大きな影響力がございまして、先ほど児童館の話が出ましたが、市民施設の方向性をここで定まっております。例えば、12ページをごらんいただきたいのですけれども、この当時何もなかったんです。婦人会館の要望とか、教育会館の要望、それから労働会館の要望など、いろいろあったわけです。12ページの下から３行目あたりからなんですけれども、市民施設を今後つくっていくに当たっては、多目的利用、複合施設、複合的な施設へいくんだと。噛み砕いて言えば、婦人会館であろうが、教育会館であろうが、児童館であろうが、労働会館であろうが、あるものは会議室であったり、ちょっとした図書スペースであったりということなので、武蔵野市としては、コミセンを中心に複合的にやっていくんだと。地域で子育てをしていくんだということで、当初は学童クラブがコミセンにあったというような時代もずっとあったわけです。それの根っこにあるのは、みんな、一つはコミュニティのあり方論もこの段階でうたっているんですが、市民施設のあり方もここで大きな流れをつくった。それに伴って、まずは市民施設はコミセンを建てていくんだというような発想の原点がここにあるということだけ、解説ですけれども、申し上げたいと思います。

それから、先ほどコミュニティ市民委員会からの報告とか、さまざまな報告をいただくんです。それを個別計画に反映したりしておりますし、地域のことであれば今後の、先ほども申し上げましたが、第５期長期計画の中で策定委員会を中心に話し合っていただく。その根っこの論点をぜひここで出していただければ、ここで出た課題を策定委員会につなげていきたいと思っておりますので、ぜひその論点といいますか、課題をぜひ出していただきたいなと思って、きょうはずっとお伺いして、いろいろな論点が出ているんですけれども、そういうことでございます。

人口の見方なんですけれども、もう一つだけ資料の見方をご説明いたします。確かに二十歳未満はしぼむんですが、武蔵野市はいつも大木型がずっと続いているんです。これは、前回もご紹介したように、非常に流動性の高い市で、18歳から25歳のときにどっと入ってくるんです。ですから、地方から大学生や就職するために東京に入ってきて、利便性が高いので武蔵野市に住む方が大勢いらっしゃって、そこでここでぐっと膨らむので、少子高齢化は進むんですが、勤労世帯の数は余りへこまないんです。だから、二十歳から60歳までの人口は他の市ほどはへこまないような特殊な自治体なんです。その辺はもともとこういう図のところです。転入者が非常に、若い世代の転入者が多い。次回推計をお持ちしたいと思いますけれども、転入する世代は18歳から25歳が圧倒的に多いという数字が出ております。

資料の見方としては以上です。

○B委員　少し補足させていただきます。

コミセンを利用していらっしゃる方が余りいらっしゃらないようなのでわかりにくいと思うんですが、南町コミセンは、コミセンはまちづくりの核であるといったときには、コミセンがいろいろな行事とか活動をコミセンが主催してやるというのではないんです。地域の中でいっぱい活動があります。環境関係のこと、ごみ関係のこと、それから、うちは地域通貨をやったり、いろいろな活動があります。その中にはもちろんコミセンが主催でやっているものもありますけれども、コミセンの運営委員や役員が主催して、コミセン主催でやるのではなく、地域でやっているグループがいっぱいあります。そういったものをコミセンがコーディネーターというんですか、核としてつなげていくことがあります。例えばうちでいうと、環境ネットという、強いてわかりやすく言うんだった専門部みたいなものがあります。ネットワークなんですけれども、そこにはコミセンが主催のものもあれば、地域の小さなＮＰＯもあれば、じゃがいもの会とか、公園のボランティアをしているグループとか、そういったものがみんな環境ネットにつながってネットワークをつくっています。必要なときにはそこが一緒に、例えば、エコフェスティバルをしたり、文化祭に参加したりするんですけれども、コミセンが主催するということではないというあたりが非常に大きなことなんです。こういった塊がうちのコミセンの場合には自発的に幾つかできてきてネットワークされています。残念ながら弱いのがまだ子どもの部分なんです。子どもの部分についてはそういったような目に見えるネットワークには、何回か仕掛けたんですけれども、ならないというのがあります。だから、それぞれのコミセンがいろいろな形で違うと思うんですが、こういったことを「コミセンはまちづくりの核である」というふうに、私は言っていることをご理解いただきたいと思います。ですから、役員がかわったとしても、まちづくりの活動は変わらずに継続していくんです。

もう一つ大きなことは、まちの中の人から、例えば自転車問題でこれこれこういう苦労をしているという話があったらとりあえずコミセンが受けて、そのことを運営委員会にかけて、できることがあったらそのことで何か会を開く。例えば「自転車問題を考える会」を開くとか、警察とか市役所の自転車対策の人を呼んで会を開くとか、そういったきっかけまではやります。その後、それがどんな会に発展していくかは、そこに参加した人たちの意思というか、意欲というか、というようなことでやっているので、うちのコミセンは非常に活動は多いんですけれども、コミセン主催のものは、もちろん文化祭はありますけれども、そんなに多くはありません。

あとは、非常に大きなことは、毎月ニュースを出しています。本当に残念なんですけれども、コミセンに足を運ぶ住民は南町の中でも何分の１です。ただ、すべての住民に、単身赴任の人も含めて、コミセンニュースという形で情報は届けています。というようなことが、もしかしたら、こういったことをやっていないコミセンももちろんあるんですけれども、コミセンはまちづくりの核であるということの意味だということを理解してほしかったんです。

あとは、先ほど事務局から施設の話がありましたけれども、これと裏表の形として初めのころからずっと専門家のサポートというのがあったんです。コミセンはあらゆることを引き受けなければならないかもしれない。子育てからいろいろなこと、その場合に、市役所から専門家としてのサポートが期待できるということがあったんですけれども、これはなかなかうまくはいっていないんです。例えば現在でもたった一つの児童館から年に一回コミセンに出前が来ることがあるんですけれども、それ以上は市役所とコミセンと両方の理由で余りそれはうまくいっていません。この辺の専門家のサポートは今後はコミセンに対して、コミセンが要望していることになっているんですけれども、私は期待したいと思って

います。
　とりあえず以上です。

○Ｆ委員　先ほども申し上げことと一部かぶるんですけれども、やはりコミュニティの問題というのは市でも非常に頭を悩まされているように、非常に重要な問題で、かつ第６期までコミュニティ委員会でいろいろ議論されている。この問題というのは、私の考えでは、軽々に議論を基本構想に織り込むというよりは、基本計画としてはここ１年以内に市としての重要計画の一つとして位置づけて、コミュニティ再生計画をつくります。それを着実に実行していきますというようなことが長期計画に入ればいいのかなというぐらいの気持ちではおります。
　Ｂさんも一番最初におっしゃったように、大胆な発想の転換というのが必要なんだろうと思います。第６回の答申を、Ｅさんがおっしゃったように生かしつつ、さらにもっと深掘りしたことを考えなければいけないんじゃないかなと思っています。
　先ほど室長から何が原因なんだろうというようなお話もありましたけれども、多分こういうのは委員会でも、コミュニティ委員会でも何度も議論されているんだとは思うんですけれども、子どもと年寄りの方は移動困難があるので地域に縛られる。あとは自営業の人は当然地域に目がいきますけれども、サラリーマンの方にとってみると、収入の糧というのは大手町方面だったり新宿だったりしていて、地域から受けるベネフィットが、本当は沢山あるんですけれども、そこについて十分認識していないということがあると思うんです。知り合いのお母さんから言われてなるほどなと思ったのは、その方は転勤族で、お子さんがいて、それでいていろいろな地域活動をしている。よく頑張れますねという話を聞くと、子どもを抱えていると地域にとけ込まないと生きていけないというんです。なるほどなという、そういう意味では、子どもが武蔵野市で産まれて、その人たちをどうコミュニティに引き込んでいくのかというのは、一番大事なことなんじゃないかというふうに私は思っています。
　さっきＡ委員がコミュニティとは別の話なんですけれどもと言いましたけれども、ものすごく関係していることだと思っています。今日いただいた資料２のフレーム案も、私はこれに不満があるのは、フレーム要旨の部分と、区分、キーワードの部分というのはもともと別々に議論されていた話なので、第２回はこの３つの区分です、第３回はこの２つの区分ですみたいに、区分のところで分けられてしまうと、あたかも少子高齢化社会が第二の視点、きょうの第３回のところだと関係ないみたいな感じの区分けになっているんですけれども、少子高齢化問題というのは、まさに地域の問題、コミュニティの問題だと思っています。そこは非常に重要なんじゃないか。
　さっき人口のところもありましたけれども、転入が多いという話、前回も出ましたけれども、そうなのかという納得感はあるんですけれども、それであきらめてはいけないのだろう。地域活動に熱心にボランティアでやっていらっしゃる方は、武蔵野市で産まれて、ずっと育ってという人がかなりのパーセンテージ占めている。そういう人がちゃんと育ち続けられるように、子どもが産まれて家賃が高いから出ていくみたいな話がありましたけれども、家賃が高くても武蔵野市に住み続けたいんだと思うようなまちにしていかなければいけないんじゃないかなというふうには思っています。
　そういう、サラリーマン世代の人たちをどうコミュニティに取り込むかという点については、私Ｈ委員の意見に賛成で、ある程度義務的なかかわり方を余儀なくさせる仕組みづくりというのは必要なんじゃないか。それが町内会がいいのかどうかというのはありますけれども、全く自由に個人の意思に任せていくと、それは遠心力がどんどん働く社会になっている中で、子どもと老人の求心力だけでは難しいところがあるんじゃないかなというふうには思います。それが五人組みたいになってしまうとまたもち

ろんあれなんですけれども。

もう一つ、あえてあつれきを恐れずに言いますと、例えば前回から自助努力というところがかなり強調される部分があって、私も法はみずから助ける者を助けるみたいな、自分で頑張っていくのが基本だろうとは思うんですけれども、そうは言っても、産まれつきではなくてたまたま運命的にとか、周りの環境とか、自分の責任があるわけでもないのに苦しい立場に追い込まれる人というのはいっぱいいるし、逆にそういう人たちにちょっと手を差し伸べることで、そういう人たちがまた立ち直っていくとか、そういう人たちがコミュニティとしてもよく回っていく。例えば、１回目のときも言ったと思うんですけれども、武蔵野市が100人の村だったときに、みんなどういう生活の仕方をするかと考えたら、それはお互い目配りしつつ、もちろん自分の家族は大切にしつつ、そうはいっても協力し合いながらという世界なんだと思うんです。そういう姿というのは、可能な範囲でということかもしれないですけれども、目指していくんじゃないかなと私は思います。その辺もコミュニティとしては考えていいんじゃないか。逆にそれで支えられ、助けられることで安心して生活できて、地域に対する帰属感なり、地域のために自分も頑張ろうという気持ちというのは余計出てくるんじゃないかなと思います。

○事務局（企画調整室長）　今、庁内でも地域の問題を話し合っているんですけれども、やはりリーダーあるいは役員の固定化とか、代がわりができないような状況というのを職員の側も感じているんです。従前は、先ほど子どもの話がありましたけれども、ＰＴＡというものが非常に社会デビューの大きな要因、子どもを中心にしてＰＴＡで地域に出ていって、その後青少協、それから地域の子ども以外の地域活動に広がっていくというような、一つの大きなルートがあったんですけれども、それもなかなか難しくなってきているというような状況があります。

あるいはＰＴＡの役員も、今、Ｆさんがおっしゃったように義務的な、背中を押される部分というのがあって、今まで余り地域あるいは社会に参加していなかった方の大きな原動力、新しい人材発掘といいますか、そういう場にはなっていたんですけれども、今その役割がほとんど果たせなくなってきた。残っていることは残っておるんですけれども、なかなか難しい状況にあるということを、役所側はそういう面では認識しております。情報提供です。

○事務局（企画調整課長）　いろいろな論点が出てまいりました。

○Ｉ委員　前回市の方が、市に勤めている人の役割は国からいかに予算を分捕ることかも一つの仕事だというようなことをおっしゃったけれども、私は逆だと思うんです。武蔵野市は国に援助するんだというぐらいな姿勢が市にないと。私は犬を見ていますけれども、犬のしつけは子どものしつけと同じで、甘やかしたら切りがないんです。どうしても20％ぐらいの落ちこぼれはありますよ。私はゲゲゲの女房の、今ＮＨＫでやっているあの時代背景に生まれた人間ですので、言っていることは生意気なことを言っているけれども、やっていることは全然底辺の生活をしていますので、その底辺の生活はわかるんです。それに甘んじてしまうと、「よしやろう」という気持ちにならないです。だから、市はいかに国から予算を分捕るのではなくて、いかに国の援助を受けないで自立できるんだということの思想を、市民に訴えるべきではないかというのが私の考え方です。その辺の思想がないと切りがないです。だから、救うんだったら徹底的に救うんです、やっていけない人は。だけれども、やらない人は働けと。働くというのは儲けろという意味ではないですよ。稼げということです。稼ぐとコミュニティはお互いにできますよ。だから、どこの会社だって会社でコミュニティができているじゃないですか。行ったらおはよ

うございます、コミュニティですよ。だから、暇な人ばかりのコミュニティだから、儲けている人はあんなに儲けやがってとひがみになるだろうと僕は思います。だから、やはり市は市で自立するんだという姿勢が市にないと、市の人にないといけないということを私は申し上げたい。

○事務局（企画調整室長）　前回の反論させていただくと、基本的には税源が移譲されて、仕事に応じた税源をいただけるならば、今、地域主権、地方分権の時代でいいんですけれども、仕事に応じたお金がきていない限り、いただけるものをいただく努力をするのは我々行政マンとして当然の務めであるという趣旨でございまして、本来的にはＩさんが言ったとおり、仕事に応じた税源、消費税の率ももう少し上げていただくという形で独自の財源をいただくのが、Ｉさんのおっしゃるとおりのことでございますので、現状においては補助金をいただけるものはいただくことをするのは我々の大きな仕事の一つだというふうに思っております。

○Ｅ委員　今、ＨさんとかＦ委員のご意見を聞いていて、コミセンに関わりを持つ中で、何か義務的な要素、背中を押すという表現がありましたけれども、そういった仕組みも、今お話を聞いていて確かに大事かもしれないなと思いました。一方で配慮しないといけない面は、第６回のコミュニティ市民委員会の最終報告にもありましたように、コミセンは自発的な場だというのがあるんです。そこについては、例えばコミセンに入ろうとしても入ったら自分が本来コミセンに入って子育ての分野をやりたいとか、やりたいと思うことがあって入ったけれども、やりたくないことまでやらざるを得なくなるとか、そういった面で入った人の義務感が出てきて、それがコミセンに対して距離感を持つ、なかなか入りにくい要素となっているんじゃないかという記述がその報告書にありました。そういった面で、義務的にコミセンにやるのと、例えば自発性、つまり義務と自発性のバランスについて、もっと議論を具体的に交わしていくと、もっと建設的な提言につながるんじゃないかと思いました。
　以上です。

○Ａ委員　今のＥさんのあれじゃないですけれども、というのであれば、コミセンの部分のところで、来させなければいけない仕組みというのをつくればいいのか。さっきＦさんもおっしゃった子育てのところを絡めていくのであれば、コミセンは大体調理室まで併設していると思っています。ただ、北町に関してはそこがいいかというのは別にあるんですが、ほかのところは比較的立地のいい場所にあると思っています。各町内１つずつ確実にあるので、最終的には小学校というのもあるんですが、防災拠点として非常にいい。一旦はあそこで集まるなり何なり、基本小学校に行けというのはあるでしょうけれども、ただ調理施設が小学校に現状ありませんから、そういう点でいうと、子育てに関するところでいうと、保育園もありますけれども、基本的にはミルクなり何なりといったときには必ず調理施設が必要となります。保育園が全部吸収し切っていただけるのであればそれは非常にいいんですが、そういう点でいうと、子どもは保育園でいいでしょうけれども、今度老人の方々になった場合、調理施設を持っているところのコミセンというのは防災拠点として非常に有用なのかなと。そういうのを考えてひっくるめていくと、子育て世代が何かあったらコミセンなり保育園へというのが巻き込める。そうすると、若い世代も、さすがに防災という観点で地震ということになると必ず行かざるを得ない状況が徐々にできて、かつそういうのがあるから住みやすいという、うまくいけば発展的にそういうふうに仕組みができる。
　もう一つは、複合施設という点でいうと、さすがに児童館の代わりはきついと思います。北町は体育館という非常に恵まれたものを唯一持っているところで、体育館で子どもがバスケットボールをできま

すけれども、子どもは２歳なり３歳がきゃあきゃあ言っていいという場でもありませんし、児童館というとちょっときつい。あそべえというのもありますけれども、あれは日曜日はやっていませんので、では、日曜日子どもはどこに行ったらいいのかという話もありますし、そこの部分でいうと、子育てのところでもうちょっと複合施設といわれるとちょっときついのかなというのが意見です。

○事務局（企画調整室長）　40年前に立てられた構想で今ずっとそれが基盤にあるというお話をしたので、良い、悪いの話を申し上げたのではないので、それが一つと。それから、町内会との違いでこの構想はできていまして、町内会というのは法律的には義務でも何でもないんですけれども、義務的な要素の臭いが非常に強い訳です。それを否定して自主的な参加だというところが大きな違いの部分があるんです。それで今までずっときて40年たったということが一つの要因と、それから、行政から直接町内会のように業務を下ろしていかないという方針がある訳です。そうすると、防災は防災、福祉は福祉、いろいろな縦割り、青少年問題は青少年問題で、それぞれの部署がそれぞれの地域の組織に呼びかけるという形になっているんです。ですから、旧来の町内会組織でしたら、その町内会に対して問題を打てば、そのような形で町内会そのものが総合性があって動くというのが、非常に図式化して申し上げているんですけれども、役所としてはそれのほうが本当は効率性は高い。行政サービスを提供するときの効率性は高い。それを武蔵野市においては、最初に説明したように否定したところからコミュニティ構想があって、それで今の現状があるということですので、先ほど本当の義務的なものではないけれども、何らかのというのは、当然出てくる論点だと、我々も認識しているというところです。非常に重要な論点だと思っております。

○G委員　A委員もおっしゃったように義務的なということももちろんすごく一つの案として立派な案だと思うんですが、私は義務的なということには反対なんです。義務的にやらされて伸びるものはないですし、義務的にやらされて続くものというのはとても難しいと思うんです。でも、市民としての義務はありますから、いろいろなことで参加して、市のためにやっていかなければいけないので、では、何をするかということで、それはほんの短い時間でできるものではないと思っています。どういうところから自発的にそういうことを築いていけるかというと、下にもありますように教育ということに限られてくると思います。というのも、小さいうちからそういう地域のつながりの大切さとか、今小学校ではどのような教育か、子どもがもう大きいのでわからないんですけれども、そういう教育を取り入れていくことが、地域の大切さ、自然に自発的に、もちろん全員がということは不可能に近いことだと思うので、小さな児童のうちに、大きくなったら徐々に徐々にそういうことに興味を持つ、そういうような教育の仕組みというのをつくっていくのが、大切なんではないかなと思っております。

○B委員　先ほどの行政の縦割りの問題なんですけれども、コミュニティセンターのことを考えるときに、それも一つ行政の課題だと思っています。例えば防災と福祉は一緒にならなければコミセンの自主防災組織はうまく機能しない。子どもとどことかが一緒にということがあります。そういったことがかなりフレキシブルに、ケース・バイ・ケースでできるような、行政の体制というか、仕組みというか、それをお考えいただくことで、市民との協働、コミセンも含めて一歩進めるのではないかと思います。これは非常に大きな問題に今後なってくるように私は思っています。

○F委員　先ほどEさんが背中を押すとおっしゃった。非常にいい表現だなと思った。あるいは義務で

はないんですけれども、背中を押す、あるいは引き込む、あるいはちょっと関わりたくなるみたいな仕掛け、先ほど私、子どもと老人の方はというふうに申し上げたんですけれども、一つ老人になってからというのは非常に難しいなというふうには正直思っています。私の兄弟会社みたいなところの嘱託をやっていて、65歳で丁度辞めますみたいな人とお昼を食べたときに、「では、これからは地域デビューですか」と申し上げたところ、「今さら頭下げて仲間に入れてくれなんて言いたくないよ」とおっしゃるんです。ああそういうふうに見ていらっしゃるんだなと。それは、さっきＰＴＡの話も出ましたけれども、子どもの時に関わり始めたら、中年の時も常に関わらせないと、大手町なり新宿に行っている人が60才、65才になってから関わるというのは、頭を下げないでいいような工夫とか、あるかもしれませんけれども、それよりは継続的に関わっている方がより良いのかなというふうには思います。

○事務局（企画調整課長）　失礼ですけれども、Ｃ委員いかがですか、今のご意見はいかがでしょうか。地域デビューという話です。

○Ｃ委員　それは頭を下げる、下げないという問題ではないから、余りそのことにこだわる必要はないし、その方はたまたまそういうふうにおっしゃったんだけれども、僕はいつからでも、お仕事のある方が退職されて、それから地域の活動に専念する、あるいは目を向けるということは十分にできることだし、それをむしろ歓迎しなければいけないことだと思います。ですから、余りこだわらなくてもいいんじゃないかと思うんですが。

　それとちょっと別の角度になって、先ほどからのお話で、コミュニティセンターに関して、私は、これは今日のお話ではなくて、もっと先、結論的なお話の中で言わなければいけないのかもしれませんけれども、私はハードからソフトへ、コンクリートから人へということでお話を始めたんですが、実は人の交流のためにはやはりきちんとした施設はあったほうが良い、究極は、というふうに考えています。それはコミュニティセンターなんですが、今南町は立派な活動をしていらっしゃいます。あちこちにコミュニティセンターはあるんですけれども、もっと規模の大きなというか、もっと複合、むしろ先ほどそれは難しいというふうにお話しされていたような児童館も含め、あるいは高齢者のための施設も含め、あるいはもっと若い人たちの施設も含めた総合的な施設をあちこちにできれば、コミュニティごとにつくるぐらいのことができたらいいなと。なぜならば、それこそ、そういう施設こそが人の交流の核になるんだろう。人の交流こそ、この市が将来的に求めていかなければいけないことだというふうに私は申し上げているつもりなので、その核になる場所、これは例えていえばヨーロッパ、欧米諸国でいえば広場というのがあります。これは広場といっても形だけの広場で、そこで大勢の人が交流をしているわけではないかもしれませんけれども、考え方としては、町々にある広場と同じように、武蔵野市にも人が集まれる広場をつくる。広場があればそこに人が集まってきて交流が生まれる。それは高齢者だけの交流ではない、あるいは若い人たち、子どもたちだけの交流ではなくて、いろいろな仕事をしている、あるいはいろいろな年代の人たちが交流できるような施設があれば、そこが町全体、あるいは武蔵野市全体の生き生きとした交流を進める大きな要因になるんじゃないかなという意味で、そういう交流の場をもっと積極的に、今までもコミセンがあるし、それぞれの活動はありますけれども、もっと大規模に、そしてもっと人々が進んで行きたくなるような、魅力的な、チャーミングな場所をつくるということが、市の将来のためには意味があるんじゃないかなというふうに考えています。

○事務局（企画調整室長）　（コミュニティ構想は）市民施設と非常に密接に関係がありますので、

（市民施設の配置の）ベースにあるのはこの考え方です。しかし、それの枠をまず打ち破り、専門館をつくったのが０１２３施設なんです。孤立する母親を何とかしなければいけないという課題を我々で認識をして、平成４年に０１２３吉祥寺という形で、新たな施設を設置しました。あれは専門館なんです。

もう一つは、コミュニティセンターの、Ｃさんの今おっしゃったことをもう一つ大きな意味で、単独館では提供できないサービスで、それでかつ駅勢圏、駅勢圏というのは３駅があるんですけれども、それに挑戦したのが、実はプレイスがそういう発想で、地域を越えた活動の拠点というような意味合いで最初スタートしているんです。

そういう意味では、これにこのまま囚われていたのではなかなか社会問題に対応できない部分については、そういう提言を受けながら修正をかけていく。あるいは基本的にコミュニティの考え方は転換するんだというような提言でもいいんですけれども、そのあたりが非常に大きな、今までの市政もずっとそのような工夫はしてきているんですけれども、その辺の今後のコミュニティなり市民施設の考え方というのが今問題になっているのかなと思います。Ｃさんのおっしゃったようなことも我々も考えてはいるんですけれども。

○Ｃ委員　例えば、きょうのディスカッションの参考になるかと思って、私初めてなんですが、緑町にある高齢者センターを訪ねたというか、ちょっと見学に行ってきたんですが、ほんのちょっとだけですけれども、あれはあれで立派な施設だと思うんですが、あれは何も高齢者だけ、あそこで単独であるんじゃなくて、あれが児童館と一緒にある、あるいはもっと誰もが使えるような大きな施設の中にあのようなものがあれば、高齢者の方と他の方、あるいは子どもたちと交流の場も持てるだろうし、そういうふうな仕掛けをすれば、もっとよりよい施設になり得るんじゃないか。そういう意味で、もちろん喫茶部がある。食事もできる。そういうものも含めた総合的なものを何かつくったらいいかなというふうに考えました。

○事務局（企画調整課長）　私が冒頭にここでご説明いたしましたコミュニティ構想の④は、まさしく今Ｃ委員がおっしゃったことだと思うんです。市民のコミュニティづくりのために市は市民施設、それから都市基盤とか、緑のネットワークを計画的にやっていくんだというのは、それはまさしくＣ委員がおっしゃったところだと思うんですが、要はできた施設が市民施設として様々な方にお使いいただけるような仕組みとか形態とか、位置というのは、それはあるのかもしれませんので、今後新しい施設をどんどんつくるという時代ではないと思いますので、今ある施設を、今、Ｃ委員がおっしゃったような、いかにうまく魅力的に使っていくか。そういうものにしていくかというのは、また次のステップとして何か工夫のしがいがあるんじゃないかなと思うんですけれども。

○Ｂ委員　私は、Ｃさんのようにより魅力的な、より大きな施設というのもあると思うんですが、私はコミセンよりもっと小さい、それこそ高齢者とか幼児を連れたお母さんが行けるような、丁目に１つぐらい、そういう居場所というんですか、よく峠の茶屋という言い方をするんですが、そういったところが欲しいと本当に思っています。これはテンミリオンハウスの一番初めの発想だったんです。テンミリオンハウスは途中で介護保険が入ったり、さまざまなことでちょっと変わってしまったんですけれども、一番初めの発想は各丁目に、近くで、小さくて、気軽に行ける場所でした。私が言っている、必ずしも丁目ごとでなくてもいいんですけれども、ちょっと歩いていけるぐらいのところでそういうところがあって、お年寄りも、障害を持った方も、それから子連れのお母さんも、というようなところは、テンミ

リオンハウスは1,000万円ということで考えているんですけれども、その３分の１ぐらいでできるんじゃないかというふうには思っているんです。簡単にいえば、場所と光熱費を一切保障してもらえれば、あとは自分たちでやっていく。そういったものがすぐそばにあることで、多分人との交流が地域でできるということです。

例えば南町一丁目で、月１回なんですが、居酒屋さんの午後の時間を借りてお茶飲み会をやっているんです。20人ぐらい70、80の方々が来るわけです。今、月に１回ですけれども、こういうようなところがどこかにあれば、お年寄りだけではなくて、いろいろな人も来るし、自分の畑で作った野菜をちょっと持ってきて一緒にお味噌汁を作って食べたりとか、いろいろなことができると思う。そういった意味での地域の手近な居場所というのを私は非常に望んでいます。それがまたコミセンに返ってくるだろうと思うんです。

○事務局（企画調整課長）　H委員、いかがですか。

○H委員　耳が遠いのでみんなが言われたことをまた言うかもしれないんですが、コミセンはかなり利用しておられる。それぞれのコミセンで特徴がありますね。だから、かなり努力はされているんですけれども、でも、賑やかかというと、特別の催し以外にはそう賑やかはないですね。なぜかなと思うんですけれども、全ての年代の人が集まって、子どもまで集まって、一緒に楽しく遊べるかというとなかなかそうもいかないので、やはりその年代のグループ、グループ、子どもが来ても、コミセンでどういう遊びをするんだというのを見ているんですけれども、子どもは走り回ったり何かしたいんですけれども、それにしてはコミセンは行儀のいい施設で、余りそれを許してはいない。ほかの大人の邪魔になりますとか。それから、今は良いんでしょうけれども、中学生とか高校生あたりがやってくると、かなり行儀の悪いやつらがあらわれて、それをどう取り締まるか、はては追い出すか、そういうようなことも心配するんです。だとすると、遊びに行きたい子どもたち、羽目を外せないしということで、そう集まって来なくなる。だから、来ている大人も会ってあいさつして、「おじさんこんにちわ」というような人もしょっちゅう会うわけでもないので、これは難しいなと思います。いろいろな催しをすれば確かに集まってきます。だけれども、しょっちゅう催しをしたのでは予算が大変ですから、それも成り立たない。ですから、子どもたち、読書をするのが楽しくて沢山集まって来るということでもないですし、見ていると何かゲーム機を持ってきて、何人かでゲームで遊んだり、それからこの頃いろいろなおまけのカードですか、変なゲームのカードみたいなものを持っていて、僕らが訳のわからないことをやっていますけれども、そんな遊びをやっているのが果たして子どもに良いのか、悪いのか迷うので。コミセンはどうしても行儀の良いつき合いの場になってしまいますので、子どもさんをどうするかというのは、体育施設で遊ばせることはできますし、それから、特別な映画とか何とかの催しをなさる、努力してやっておられますけれども、それはそれで良いんですけれども、子育てから見られた場合に、どのくらいの頻度で、どういうふうに活用したいかというのはあります。月に１回、２回、そんな映画を見せるので有効だとは思わないんです。だから、どういう形で、子どもさんは子どもさんの場で、お母さんが育てる。ちょっと待たしている間に何とかできるような、託児所に近いような、何か機能が欲しい。それは行儀の良い大人とがちゃがちゃにならないとか、だけれども、助けてくれるとか、そういう雰囲気が本当にできるかなということです。

さっき申し上げたように、コミセンも非常に良い施設ですけれども、余りにも自由運営になり過ぎていて、町内会の一部的に市とのしっかりした、ある種の連携を持たないと、市の方もわからないんじゃ

ないですか。だから、連携を持って、コミセンとしょっちゅう対話するとか、状況を見るとか、知りませんけれども、市の方はどのくらいコミセンを回っておられますか。だから、いろいろな管理とか企画で大事なのは、その現場を見ることです。会社でもそうでしょう。現場を見ることです。それからフィードバックします。ですから、ぱっと指令を出して、ふっと通達を出して、ぽっと置いておいたら、物は進まないです。ご苦労さまですけれども、ごらんになって、今申し上げたように、コミセン全世代、いつも一緒にがちゃがちゃと楽しくというのはちょっと難しいので、ある種の企画がどうしても必要になるんです。ただ、良いシステムではあります。ただ、余りにもちょっとばらばら過ぎるんじゃないですか。

○Ｉ委員　私はコミセンは選挙のときに一回コミセンでやりました。それは全然使ったことがないのかと申しますと、私どもお散歩屋の研修会は最初コミセンでやっていたんです。コミセンでやっても人が集まらないんです。今ここでやっているんです。ここの会場で、50名弱の方が毎月290回目です。必ず来ます。何で来るのかというと、やっぱり情報が欲しいから来るんです。情報がなければ生きていかれないんですよ。そのかわり、１時から始まって、１時に１分でもおくれたら入れない。３時で終わったらきちんと３時に皆全員帰ります。

　コミセンというのは、パソコンの勉強会もコミセンを利用させていただいたし、南町は違いますけれども、コミセンを使っていました。ほかのコミセンも狂犬病の件もあるから度々行きましたけれども、使っている人は少ないと思います。なぜそれを利用しなければいけないかということ自体私わかりません。コミュニティはもっといっぱいつくれるのに、やれるのに、わざわざそこに費用を。私は民生費の内訳、民主党がやっている事業仕分け、私は仕分けのあれに今度入ろうと思っています。民生費が無駄になっているかどうかというのを。私はそれぐらい大きな問題になっていると思うんです。無駄なものは止めていって、もっと有効なものに使う。一言で言うと、やはり人ですよ。飲み屋さんでも何でも、儲かっているところと儲かっていないところ、人ですよ、場所ではないんですよ。規模でも何でもないです。だから、私の言い方は余りにも失礼な言い方ですけれども、政治家も60才、70才というのは辞めてもらって、政治家も同じように、コミセンの方々ももっと若い人に、名誉として、南町は別ですけれども。私はもう60才、70才の人は、Ｈさんあたりの意見を聞くことは温故知新ということで絶対必要だと思うんです。昔やってきたことを見習って、親父の言うことを聞いて見習ってやるんですけれども、実務担当者は40代に切りかえなければいけないです。政治家だって同じ。だから、多分コミセンの今の活動していない一つの大きな理由は、コミセンを経営している長に問題がある。コミセンの内情そのものに問題があるんじゃなくて、長に問題があると私は思います。

○Ｆ委員　私は今の意見に賛成で、人なんだというのは本当にそうなんだと思うんです。上物をつくる、つくらないみたいな話がありますけれども、居場所が必要だというのはコミュニティにとってはすごく必要で、大学のサークルでも部室があれば皆そこに何となく集まって、コミュニティができるというのはあるんですけれども、一方で、それがどんどん閉鎖的になっていくんです。グループ以外が入りにくくなっているんです。そういう意味で、先ほどＣ委員がおっしゃられた広場というのは、非常にそこがバランスがとれていて、場所にもなるし、入りやすくもあるみたいな、ちょうど良いバランスのところがそういう広場みたいなイメージなんです。第１回のときも出ましたオープンカフェみたいなイメージであればいいんだと思うんですけれども、閉鎖的になっていくのは良くないだろうというのが一つ。

　もう一つは、やっぱり人なんだろうなと思うのは、いろいろなＮＧＯ的な活動で、やっていることが

良いからとか、それに共感してということで参加し始めた人も、続けるかどうかというのは、結局その長とか、グループの仲間といいコミュニケーションがとれて、一緒にやって楽しいかどうかで決まっていくことはすごく多いなというふうに思っています。そうすると、物をつくって、そこで何かをやっていくというよりも、では、そこでどういう人がいて、継続的にコミュニティの連結点になってくれるのかということを考えないと難しいんだと思います。多分犬の散歩の場合はＩ委員がそこになっていて、そこにいけばいつもＩさんがいて、面白い話ができて、かつ犬の散歩でお金も儲けられるとか、いろいろ良いことがあるから、複合的に続いていって大きくなっていっていくんだと思うんですけれども、物をつくったときに、そこで、あそこに行けばあの人に会えるからというところのソフトのところまでどうつくり込んでいくのかというのを考えないと、いいコミュニティはできないんだろうなと思っています。

○Ｄ委員　自主三原則がずっと40年近くいってこられたんですけれども、今はコミュニティにも協働の考え方を入れていって、市民の自主性に任せていただきたいのですけれども、行政でも的確なサポートを、個別のコミュニティに、一つ一つのコミュニティに的確なサポートをしていっていただきたい。そういうふうにしないと、市民の負担がとても大きくて、なぜＰＴＡから青少協にいかないか、青少協からコミセンになぜいかないか。こんなにやらされるんだったらとても嫌ですよという感じでみんなフェードアウトしていくという人がとても多いので、それがとても楽なんだよ、簡単にやりたい感じでやったらいいんだよというような形があればもっと入ってくる人もいるんじゃないか。あそこにいったらすごい大変な目に遭うというふうなのがあるので、ちょっと青少協にも関わりたくないし、コミセンにも関わらないという人が周りにとても多いです。

○事務局（企画調整課長）　前回も一度入ったら足が抜けられないという話もありましたし、今日の範疇というのを地域ということで考えますと、私たちも本当に心配していますが、コミュニティもそうですし、例えばよく出てくるのは自衛消防団も、代がわりができなくなっていって、あれも地域のコミュニティで、自分たちのまちをよく知っている人たちが自分たちのまちを守るという話だと思うんですが、そこの代がわりができていかないとか、それもコミュニティだと思うんです。ああいうのが地域の力としてどうやって育てていくかというようなことを考えなければいけないのかなとは思うんですけれども。

○Ａ委員　消防団が身内にいるんです。消防団、４分団なんですけれども、他にも御神輿を担いでいる都合上、１から12をほとんど全部そこそこ知り合いがあちこちいたりするんですけれども、おっしゃるとおり高齢化はすごいです。武蔵野市の、露骨に言うと、御神輿の方にいっても若いのはほとんど下が入ってこないんです。僕は18年間やって、いまだにずっと底辺なんです。底辺からずっと上がっていけないんです。御神輿に関して言うと、どこもあちこちの担ぎ屋さんみたいなのが双方で行き来している状態でというところが非常に強い。ただ、最近一応世代がだんだん下も入ってきてはいるんですけれども、やはり高齢化ぎみで、上げるのは結構きついというのをたまに出てきたりしています。そう考えると、そういう面でいっても、特に商店街系はどんどんチェーン店が入ってきて、昔の人というのはどんどん減っていく。平和通りなんですけれども、あそこも青年部といいながら実は40代しかいなかったり、下はどこにいったんだろう。そういうふうになっているのも、地域としてというのは、コミュニティだけではなくて、商店街的にも高齢化というのは問題がきているのかなというのは非常に思っています。解決方法がどうこうというのはなかなかないんですけれども、そういう現実というのは非常にあるなと

思います。

○事務局（企画調整課長）　かなり広いジャンルだったんですが、特に地域、それとコミュニティに話が収束しておりますが、残り時間は少ないんですけれども、余りここに拘泥するつもりはございませんので、次回ということでもよろしいかと思うんですけれども、問題提起として、今日せっかくなので、例えば何か違うご意見が、地域だけではなくて環境とかで、ございませんでしょうか。

○Ｉ委員　杉並のをごらんになったことがありますか。杉並の行政、変わりましたよ、山田区長が来られてから。感じるでしょう。僕は会ったことはないけれども、掲示板を見ただけでわかります。掲示板に全部多種多様の情報が出て、今度は１年か２年後には多分、僕の想像ですけれども、張る場合に１枚10円取りますよ。それぐらいに、酸素だって有料の時代ですよ。酸素も売っているんですよ。ただのものはないんです。皆さん余りにも全てがただ、ただ、無料、無料、ボランティア、ボランティアと言っていますけれども、杉並は完全に変えましたよ。杉並区長に会っていませんよ。名古屋に行ってください。市もみんな商売ですよ。稼げなかったらいけないという思想が絶対大切です。それでなかったら、何をやっても、コミセンをやっても何をやってもだめです。だから、まず第一に必死になって、ただ、無料、無料というのは、私は最終的には高いつけを払いますよ。払うことになりますので、すべての面で、だから、ぜひ杉並区の掲示板を見にいって欲しい。どういうような内容が張ってあるか。武蔵野市と比べて欲しいんですよ。市の行政が一発で分かります。だから、山田区長は残念だけれども落ちたけれども。これは仕様がないですけれども、やっぱり人ですよ。上に立つ長の人によって考え方も行動も変わってくるんです。建物ではないです。

○D委員　先ほどＦ委員もおっしゃっていたんですけれども、前回自助努力ということがとても大事だというお話になっていたんですけれども、自助・共助・公助のバランスというものは大事ではないかというふうに考えています。公的なセーフティネットが今だんだんあやしくなってきて、もともと日本はそういう公的な社会保障を家族とか企業で補ってきた部分があるんですけれども、今家族がどんどんそのセーフティ機能が低下していて、高齢者の120歳がいなくなっているとか、そういう無縁社会が今どんどんいろいろなところでいわれているんですけれども、そういう意味でも、公助の部分もかなり大事なことではないかなと思っています。

私も今「武蔵野の福祉」というふうな、こういう冊子がありまして、あれで見ていましたら、一人親家庭の相談件数が平成14年ぐらいからどんどん毎年上がっていて、平成20年度は、たしか1,600件ほどございます。今離婚率というのもとても上がっていますので、離婚するということは珍しいことではありません。子どもを抱えた方が離婚する。もしその方が専業主婦だったとすると、途端に貧困ラインを割ってしまう、そういう年収200万円以下の生活になったりするわけです。そういうときに、一人親家庭の支援がないとその危機を乗り越えられないというようなことがありますし、公助という部分も大事ではないかなということを申し上げたいと思います。ただ、それもまた民間がそういう支援をできるようになって、そのサポートを行政がまたしてくださるというのが一番将来的には良い形だと思うんですけれども、いろいろなリスクはつきものですので、その部分を自己責任でというふうにいってしまうと、それは支えられ感のないまちになってしまうかなという感がいたしました。

以上です。

○H委員　このコミュニティ構想の11ページのコミュニティの誘導戦略とございますね。これの５行目に、市民施設を計画的につくる、適正配置する。５行目に、市民施設の市域全体における全体効果を高めるためネットワークシステムをとる。このネットワークシステムというのはどこが主体でやっておられるんですか。市がとっておられるんですか、それともどこかそういう担当のあれが、市民団体があるんですか。

○事務局（企画調整室長）　これはここの次のページ、13ページに、この当時はこういう緩やかな地域の枠組みの中で、この核たる施設としてコミュニティセンターのネットワークをつくるという形で具体化したということです。

○H委員　これの運営みたいなものがはっきり分かるとありがたいですね、そういうことです。

○事務局（企画調整室長）　現状は地域生活環境指標にコミュニティセンターの図がございますので、そこに現状は出ておりますので、ぜひごらんいただければと思います。

○B委員　資料としては昭和何年かに出たものですね。

○事務局（企画調整室長）　これは46年です。40年前の文章ですので、40年前の（文書）が計画行政の鑑みたいなところなんですけれども、40年前の構想、計画がいまだに脈々と、我々もその当時いませんでしたけれども、その発想は引き継がれている部分があるんですね。当然、先程言ったような形で原則を破っている部分も、あえて破っている部分もある。今後どうしていきましょうかというのが今日の資料を用意した趣旨でございます。

○B委員　自助の話なんですけれども、私は、あるいは私たちは喜んで税金を払っているのは、自助ではいかない、よくいわれる弱者がいると思うんですけれども、その人たちの為に私は税金を払っていると思っているので、そこのところはいつの時代でも公的にきちんと支えなければいけない部分で、これだけは絶対に緩めないで欲しいと思っています。

○事務局（企画調整室長）　他にいかがでございましょうか。次に繋がるお話でも結構なんですけれども。

○F委員　先ほど市から政策を出してみたいなお話も二、三出てきたかと思うんですけれども、私もそこはぜひお願いしたいなと思っています。第三次武蔵野市行財政改革を推進するための基本方針、これの前段階の答申のところだったかと思うんですけれども、市としてももっと積極的に政策官庁としてやっていって欲しいみたいなことが書かれていたと思うんです。それは本当にそのとおりで、この資料２だと、第２回の第１の視点のところに行財政改革、政策評価とか、位置づけられてしまっているんですが、むしろ、どちらかといえば第３の視点に本来入ってくる話かなと思うんです。そうした中で、行政改革、政策評価、事業仕分け、ＰＤＣＡサイクルの確立という、ここに４つキーワードを入れていただいていますけれども、そこのところを本当にしっかりやっていっていただければ。行財政改革アクションプランも非常にいろいろ良いことをやっていきますというふうに宣言していただいておるんですけれ

ども、では、これのＰＤＣＡはどういうふうにやっていくのか。たまたまこれを見ていますと、行財政改革アクションプランの中でも、例えば取り組み事項として、長期計画の成果目標の明示、目標達成状況の公表及び事後評価の実施ということが書かれています。21年度に検討します。23年度に実施しますという計画になっているんですけれども、今度の長期計画において成果目標、活動指針というのを明示して、そのＰＤＣＡサイクルを回していくというふうに理解していいでしょうかというところと、これが事後評価を行うということだけになっているんですけれども、長期計画が10年だと長過ぎますよという話を最初にさせていただいたのとも絡むんですが、長期計画というのはもっとざっくりした概念だけでいいぐらいで、個別計画で、コミュニティの問題にしても、あるいは自転車の問題はどの市政アンケートであれ、この前の調整計画の市民意識調査報告書であれ、最重要で一番みんなが不満に思っている部分です。そういったことを長期計画で細かいことをるる決めるんじゃなくて、それはしっかり落とし込んでやっていって、しかもそれは毎年毎年しっかり見直して、微修正なり加えながらやっていかないと、今日のコミュニティの話一つとってもいろいろな意見があって、やってみてここはうまくいかなかったと出てくると思うんです。それを40年前の計画に縛られるんじゃなくて、基本理念は大事にしつつ、具体策のところは臨機応変に変えていくということが必要なんじゃないかというのを、今後につながる話ということでもあるので、言わせていただきました。

○事務局（企画調整室長）　アクションプランの進行状況をまとめたものがございますので、それは次回ご説明させていただきたいと思います。

　それと、今ざっくりしたというのはそのとおりで、どちらかというと予算の進行管理とか個別計画の進行管理は事業別にやる必要はあるんですけれども、その事業とか施策の束の政策的な効果の大まかな評価も必要なので、それは長計レベルでどういう形で、施策の束がどういう効果を及ぼしているかというような、そういうざっくりというのは、Ｆ委員がおっしゃったのはそういう意味のざっくりだと思うんですけれども、長計の役目なのか。ですから、長計は長計で点検をしていかなければいけないというふうに思っていますので、今後それも大きな長計の論点になると思います。

○Ｅ委員　きょう別の論点も提出したいんですが、時間も迫ったので簡潔に申し上げますが、今日は地域をどうするかというテーマが大きなテーマで、その中でコミセンの果たす役割とか、そういったことが大きく論じられていましたが、別の視点として、市民委員会にもっと市民をもっと関与する仕組みができないかということも一つのアイデアだと思います。例えばお隣の三鷹市では、無作為抽出で市民委員が委員会に参加する機会を持つ仕組みを最近導入されました。そういったことで、最初は市政に距離を持っていた人が、たまたまの偶然で選んでいただいた、では一回出てみようか、そういったことでもしかしたら地域のこと、コミセンのこととか、そういうことに興味を持つ、背中を押してもらう、そういった機会があるんじゃないかと思うんです。そういったことで、市民委員会、市民がより多様な市民、限られた人が何回もいろいろな種類の委員会に積極的に参加する、その意義も専門性を磨く意味であると思いますが、多様な市民を委員会に取り入れていく。そういったことで地域をより活性化していくとか、そういったことも今後考えていっていい問題ではないかと私は思います。

　以上です。

○事務局（企画調整課長）今おっしゃったとおり、今回長計の策定に当たりまして無作為抽出を３回やって、3,000名の市民の方にお声がけをして、それはこの長期計画の策定だけではなくて、その後もい

ろいろな形の市民参加ということを模索していく必要があるだろうというところですので、その辺も今後また私どもも研究していきたいと思っています。

3. その他

○事務局（企画調整課長）毎回でございますが、約束の時間でございますので、ちょっと尻切れになった感がございますが、きょうはここまでとさせていただきたいと思います。次回でございますが、９月17日、また場所が三鷹のツインタワーに戻りますが、同じ時間、午後７時からということでございますので、どうぞよろしくお願いいたします。また、本日はありがとうございました。

（了）